【2】研究の経過と本年度の取り組み

〔1〕平成4年度（1年次）の取り組み

平成4年度から新たに「コミュニケーションに視点をあてて」の副題のもと研究に着手することとなり、中学部でも、中学部の生徒のコミュニケーションの実態はどうか、中学部の生徒にコミュニケーションの力をどうつけていくのか等について考え、研究の方向を模索した1年であった。

(1) 実態把握の方法の検討と実施

生徒のコミュニケーションの実態把握の方法として、毎年行っている津守式乳幼児発達検査、段階別教育内容表のⅣ段階到達度評価、「生活リズム調査」や「性に関する調査」を継続すると共に、S－M社会生活能力検査、コミュニケーション・サンプルの分析を新たに取り入れ、実施した。

(2) 研究の構想の立案

中学部のめざすコミュニケーション像として「楽しんで、豊かに人とかかわる子」を設定すると共に、120頁の資料に示すように、コミュニケーションに関するつけたい力をまとめていった。個々の生徒についても、資料に示すように、個人目標やめざすコミュニケーション像、つけたい力等を明確にした。また、主な研究の実践場面として「生活単元学習」「課題別学習」「日常生活の指導」を取り上げることにした。これらの研究の構想は、70頁に示す「研究の構想図」としてまとめられていった。

〔2〕平成5年度（2年次）の取り組み

1年次に立案した研究の構想に従い、実態把握を継続しながら、授業づくりの実践を重ねた。またコミュニケーションにおける中学部のねらいが焦点化されまとめられた。

(1) 実態把握の継続

1年次に実施した各実態調査・検査を継続して行うと共に、WISC－R知能検査を全員に実施し考察が加えられ、指導に生かすこととした。

(2) コミュニケーションにおける中学部のねらいの設定

次に挙げる5つの点について、全体的な高まりをめざして実践していくこととした。

①〈**意欲・態度**〉自分の持つコミュニケーションの力を十分に活用していこうとする意欲や態度を養う。

②〈**受容**〉相手の伝えたいことを受け止め、理解する力をつける。

③〈**表出**〉様々な知識・表現手段を習得し、自分の思いを表現する力を身につけさせる。

④〈**環境**〉より多様なコミュニケーションの対象や場を保証し、社会生活への関心の拡がりを持たせる。

⑤〈**自己認識**〉思春期を迎えた心とからだを自分なりに受けとめ、見つめさせる。また、人との関わりを大切にした取り組みの中で、自己内対話を活発にし、自制心の形成を図る。

(3) 授業づくりの取り組み

授業づくりを進める中で、71頁に詳しく述べるように、「単元や題材の設定及びその配置」「指導者の関わり方」「個を生かす指導の工夫」「家庭との連携」の4つの観点が定められ、よりよい授業をめざすこととなった。そして、主な研究の実践場面である「生活単元学習」「課題別学習」「日常生活の指導」において実践が重ねられた。

(4) 個に視点をあてた個人事例の追究

学部の共同研究を背景に、各担任が対象児を選び、仮説を立て、意見交換をしながら、事例研究を進めた。この意見交換を通して、生徒に対する様々な考え方が出され、共通理解が図られ、次への手だてが考えられていった。

〔3〕本年度（3年次）の取り組み

本年度も、実態把握を継続しながら授業づくりの実践を重ねた。また、事例研究の進め方にも工夫が加えられた。さらに、本年度はコミュニケーションに視点をあてた研究の最終年次となるため、取り組みを振り返り、成果や課題を可能な範囲で評価していくこととした。

(1) 実態把握の継続

各実態調査・検査を継続して行うと共に、個に適した検査法を見いだし実施することにより、さらに詳しく実態を知ることに努めた。

(2) 授業づくりの取り組み

本年度も、授業づくりの観点にそって、授業を組み立て、実践し、評価を次へ生かすようにした。授業づくりの主な実践の場については、次のように考えた。

「生活単元学習」── 生徒が多様なコミュニケーションの対象や場を得て、楽しんでコミュニケーションをしながら、生きた力とする学習の場としていく。

「課題学習」── 1～2年次は、学級を解いた課題別のグループ編成をし取り組んだ。本年度は、さらに効果的な学習をめざして、養護・訓練と基礎学力の課題の中から個に応じた学習内容を選び、担任が中心となって毎日繰り返し指導し定着させることにより、より生活に生きる力としていく。

「日常生活の指導」── 第二次性徴期を迎えた自分の体について理解させながら、中学生らしい言動・マナー等を身につけさせていく。

(3) 個に視点をあてた個人事例の追究

本年度は、発達の段階や障害を考慮して生徒を大きく4つのグループに分けて事例を取り上げ、指導の成果が対象児以外の生徒にも般化されるよう配慮した。

(4) 評　価

本研究の最終年次として、コミュニケーションに視点をあてた研究の成果や課題を探る。